資本主義発展と社会構造の変化について（I）

——シュムペーターの資本主義崩壊論——

大　野　忠　男

I　はしがき，113．——II　シュムペーターの階級理論，118．——III　社会階級の形成と衰退，126．（以上本号）　IV　ブルジョア社会の構造と変化．——V　資本主義体制と経済的成果の問題．——VI　むすび．

"Stationary capitalism is a *contradictio in adjecto*."

SCHUMPETER

I　はしがき

シュムペーターの主著である『景気循環論』（Schumpeter〔19〕）は今日一般の経済学徒にとって，まことに奇妙な存在として目に写るに違いない。それが副題の示すように理論的，歴史的，統計的分析であるという点では，格別抵抗は感じないと思われる。けれども，かれがその序文の冒頭で，「景気循環を分析することは，資本主義時代の経済過程を分析すること以外のなにものをも意味しない」（*ibid*, p. v; 邦訳，原著者序1ページ）と書いたとき，読者はかれがそもそもなにを言わんとしたか，直ちに理解しがたいものがあるだろう。もちろん，この2巻1075ページに及ぶ大著の，細部の分析の一々について批判するだけの力はわれわれにはない。しかし，なによりもまず，この書の構成がきわめて複雑であって，景気分析の理論的装置の部分，経済史に関するかなり詳細な叙述，そして厖大な時系列の分析，さらにはところどころに含まれた社会史の断片など，これをいかにして統一的に把握すべきか，いささか戸惑いを感じざるをえないであろう。あらゆる古典的大著がその中に混沌を蔵することは事実であるが，人はあの難解なマルクスの『資本論』の方がはるかに一貫した筋道を示していることに満足を覚えるかもしれない。

そもそも景気循環の分析は何故に，資本主義過程の分析でなければならな

いのか。ハーバラー，ヒックス，カレツキ，ハロッドなどの景気循環の理論に親しんできた現代の経済学徒にとって，まずこのことが疑問に思われるに違いない。実際シュムペーターが端的に資本主義過程の社会経済史を書いたのであったなら，かれの書物ははるかにポピュラーな，またずっと興味深いものとなっていたであろう。けれども，かれはウェーバーやゾムバルトのように社会学者ではなく，シュモラーやトーニのような経済史家でもなかった。かれはあらゆる経済理論に通じた経済学者であって，いたずらにウェーバーの後塵を拝することに満足しうるような人物ではなかったのである。かれが『経済発展の理論』〔16〕を書いた頃にはすでに，静学的均衡理論は自足的な体系としていちおう理論的に完結した形を取っていた。けれども，経済発展ないし景気回転の理論はいまだ満足な形で提供されていなかった。したがって，経済学者としてのかれの関心が逸早くこの方面に向けられたとしても不思議はない。注意すべき事柄は，かれはドイツ歴史派経済学を批判しながらも，経済社会学者としてのシュモラーの業績を高く評価し，資本主義発展の本質的形態に属する景気循環の研究は〝シュモラーの方法〟によらなければならぬ，と考えていたことである。そして，かれの『社会階級論』〔14〕の前身にあたる「国家と社会」と題する講義は，『発展』第1版の出版以前にすでに行われていたのである。

われわれは，『景気循環論』の大きな部分を占める時系列の分析がこの書物から除かれていたならば，この書がはるかに読み易いものになっていたであろうと考えることもできる。けれども，その結果はかれの学問的課題の要請から遠くかけ離れたものとならざるをえなかったであろう。なぜなら，経済的数量のビヘイビアと，その根底に存在する「広義の人間行動」との間の関連を解明することこそ，余人にはなしがたいかれ自身の学問的野望だったからである。ここに「人間行動」というのは，人間の「行為や動機や性向のみならず，政府，財産相続，契約等々のごとく経済行動に関連のある社会制度」一般をさす (Schumpeter〔18〕p.21)。かれの循環的発展のモデルはこれら

の制度的要因を与件として含む「制度的」モデルであり，このモデルによって予想される発展の輪郭——それは経済諸数量の動きの一定のパターンによって現わされる——が，いわゆる「外的要因」によっていかに歪められたか，またそれにも拘らず，このモデルの示す発展過程が歴史的世界の中でいかに貫徹されているか，ということを実証的に解明することこそかれ本来の課題だったのである。さらに発展そのものがある種の「人間行動」によって起動され，その結果それがある特殊な形態——それが景気循環に他ならない——を取らざるをえないのであるから，こういった「人間行動」の分析はかれの課題にとって不可欠な前提とならなければならぬ。これら両者の作用方式とその間の関連とが歴史的かつ分析的に解明されたときに初めて，かれの『景気循環論』は資本主義過程に関する「普遍的歴史」，すなわちかれの体系の目標である「思惟的（理論的）に彫琢された普遍的歴史としての統一的社会学ないし社会科学」に接近することができるのである。(1)

かれの『景気循環論』がかかる性格をもった，独自な，資本主義過程に関する「歴史的理論」或いは「理論的歴史」であったということが，まず確認されなければならない。われわれはその中に含まれた数量的分析に目を奪われて——もちろんそれはシュムペーターの最も力を注いだ部分であったけれども——，その理論が動学的純粋理論としての景気循環論とは全く異なる次元に立つものであったことを忘れてはならない。したがってわれわれは，単に経済学的分析装置のみではなくて，制度的与件一般に関するかれ自身の理論への理解なしには，これにアプローチすることがむずかしい。そして，かれの資本主義過程に関する経済学的，社会学的分析は，後に『資本主義・社会主義・民主主義』〔20〕において，よりポピュラーな形で，全面的に展開されたのであるが，われわれはかくして初めて，かれが当初から意図してい

（1）「普遍的歴史」ないし「理論的歴史」（Histoire Raisonné）という，今日では聞きなれない概念に関するかれの考え方については，別の機会に詳述しておいた。拙稿〔9〕第3節参照。

た壮大な体系の全貌に接することが可能になったのである。こういったかれ本来の体系の立場から改めて『景気循環論』を読み返すならば，われわれはそのモデルが何故に「制度的」モデルでなければならないか，また循環過程の経済学的分析にとって「外的要因」として取扱われたものが，何故にかれの「過程」にとっては「内的要因」とされたのか，そして，景気循環の解明が何故に「資本主義過程」の分析でなければならなかったか，ということが納得のいくものとなるであろう。さらに，こうしたかれの見地に立つことによって初めて，かれの数々の社会学的著作がかれの体系の中で，どこに位置づけられるべきかを理解することが可能になるだろう。

経済的数量のビヘイビア（経済発展の歴史的輪郭）はもともと，かれの場合，歴史的かつ分析的に，「人間行動」によって規定されているのであるから，それらの間の関連が，なんらかの定式化によって，満足に解明されるのでなければ，われわれは資本主義体制の機能とその歴史的過程についてなんらか有意味な事柄を語ることができない。『景気循環論』はもっぱら経済的側面の分析，すなわち時系列の統計的取扱いの問題に重点がおかれており，したがって，そこに前提されかつ関説された「人間行動」に関する側面はこれを別な著作に求めなければならない。そしてこの側面に関する基礎理論は，かれの社会学的著作，なかんずく『社会階級論』によって与えられたというのが，われわれの見解なのである。（この点については稿を改めて詳論したいと思う。）それゆえわれわれは，この忘れられた，シュムペーターによる社会学への単なる excursion と見なされてきた労作を取上げて，その本質と分析射程とを再検討することにより，シュムペーター体系への接近を試みたいと考える。

かくして，われわれはまた，かれが資本主義は崩壊する，或いは自己崩壊への傾向をもつ，と述べたことがなにを意味するかを正当に理解することができる。かれがマルクスに従って，ことさら「崩壊」というショッキングな表現を固執したのは，一部「ブルジョアにショックを与える」（*épater le*

bourgeois）というかれの平生の習癖（Harris〔3〕p. 7）にもとづくものであったとともに，さらに憶測を逞しくするならば，実際には資本主義経済の崩壊を信じてもいないマルクス主義者に「ショックを与える」という，かれ一流の皮肉から出たものだと勘ぐりたくもなる。しかし，これを真に科学的に理解しようとするならば，それは次のように解釈すべきであると考える。すなわち，かれが「崩壊」というのは，一部のマルクス主義者が今なお主張しているように，資本主義経済が大恐慌とかなんらかの原因によってガラガラと倒れる――そういう場合も全くないとは言えぬにしても――というのでは決してなくて，あたかも封建制度が封建的貴族階級の解体とともに徐々に崩壊していったように，資本主義秩序，或いは資本主義「文明」もいずれは，ブルジョアジーの解体とともに崩壊する，つまり別な秩序類型へ移行するであろう，ということを意味するものに他ならない。そして，今日すでに，そういった社会的変化への兆候が見られるのである。さらに，資本主義文明，とりわけこの体制の経済的成果は，直接ブルジョアジーの能力ないし適性と結びついてのみ理解しうるものであったから，ブルジョア階級の急激な解体は当面資本主義経済の発展を阻害し，長期〔数世紀〕にわたる円滑な歴史的移行過程を中道で行き止りにするおそれが多分に存在する。大切なことは結論――それは全く自明な事柄のように思われる――ではなくて，移行の過程の内在的論理を解明することでなければならない。この意味において，封建的貴族階級の発展と衰退との跡を辿ることは，資本主義の将来の命運について，また資本主義文明（ならびに経済）の担い手としてのブルジョア階級の衰退・消滅のプロセスについて，多くのことをわれわれに教えるであろう。かれは『社会階級論』において，これらのプロセスが同じ階級現象に属し，かつ同一の根拠によって説明しうることを明らかにした。したがって，われわれはまずかれの社会階級の理論について概観したのち，資本主義体制に内在する「自己崩壊への傾向」を，経済発展と社会構造の変化との関連の中に見出したいと考える。こういった社会変化の過程について一個のスケッチを与える

ことができたならば，本稿の課題は果たされるのである。

II　シュムペーターの階級理論

シュムペーターの階級理論は，かれの資本主義過程に関するヴィジョンが形成された1907～1909年の頃，それとほぼ同時にその基本的輪郭が出来上っていた。そして『経済発展の理論』第1版（1912）の刊行に先立つ1910年に，チェルノウツツ大学で行われた「国家と社会」と題するかれの講義において，すでにその概要がまとまった形で発表されている。しかも，後に1926年にハイデルベルヒ大学で同じ主題についてかれが行った講義は，「指導力と階級形成」というそのタイトルにおいて，かれの階級理論の本質をよく示していると言うことができよう。かれの「経済発展」の理論が指導者社会学の一片からとった「企業者」という範疇にもとづいて構成されていたように，かれの社会階級の理論もまた，発展一般に関する同様なヴィジョンから生れ，同様な社会発展のモデルを用いて構成されていた。かれがこのような着想をどこから得たかは必ずしも明らかではないけれども，社会は一般に指導者と被指導者とから構成されている，という考え方は，当時における思想界の一方の風潮をなしていたものと考えて差支えあるまい。かれの師であり，またかれの思想に最も近いウィーザーは「少数の法則」（"Gesetz der Kleinen Zahl"）という社会学的命題の提唱者として知られており（Wieser〔26〕），かれは社会ないし国家の形成と秩序における「指導力」のもつ役割を強調している。指導者は社会進歩の担い手であって，かれらの活動がなければ社会に進歩はなく，人間が多数の平均人の力にのみ限定された世界は静止的世界であるとかれは述べた。(2) したがって，シュムペーターの階級理論は

（2）ウィーザーは「匿名の歴史」としての歴史的社会学ないし経済社会学に関心をいだき，国民経済と権力ないし勢力（Macht）との関係を追求して，「社会的行動」一般の考察に行きあたった。かれの社会学的労作は，プラーグのカール・フェルディナンド大学総長就任講演 "Die Gesellschaftlichen Gewalten"（1901）にまで遡る。その他初期のものとして，スペンサーの〝偉人説〟に対して論評を加えた，ス

もっぱら社会における指導者階層，或いは支配階級の形成とその衰退の現象を対象として展開されており，その点で，抑圧されたプロレタリア階級の中に世界史を変革する歴史的使命を見た，マルクスの階級理論と著しい対照を見せている。

マルクスが資本主義の社会経済現象を，かれの蓄積の理論と階級理論という二つの，しかし同一の前提，すなわち資本の論理から演繹的に説明したのに対して，シュムペーターは「指導力」の原理をもって社会的，経済的発展のダイナミックスの核心に据えた。マルクスは資本主義の発展がたえざる生産の変革＝革新から成ることを認めていたにも拘らず，これを遂行した個人ないしグループの貢献についてはこれを全く無視し，かれらを「新たな金融貴族」とか「名目上の重役，発起人，創業者……新種の寄生虫」などと呼んで，口汚く罵っている。かれは革新という行為のもつ主体的契機を全く排除して，もっぱら「所有」という要因にのみ重点をおき，企業者ないし資本家階級は単なる資本の論理の演技者にすぎぬものと考えた。マルクスの場合，物としての資本が一切の社会関係ならびに生産力を体現するものとされており，より大きな所有＝資本はより小さな資本に打ち克って，自動的に成長をつづけるのであるから，個人的創意や創造的行動がその図式に入りこむ余地は全く残されていなかったのである。(3)

マルクスの資本の論理はそれ自体の弁証法的発展によって革命的プロレタリアートを生み出すのであって，かれの階級理論は，したがって，プロレタリア階級がいかにしてその歴史的使命を自覚するにいたるか，という諸条件を探究することに向けられていた（大野〔10〕）。これに対して，シュムペータ

コットランド人ギムナジウム創立100年記念講演 "Arma virumque cano" (1908) がある（いずれも Wieser〔27〕に収録）。

（3）マルクスの哲学ないし神話的思考からは，個人的ないし人格的要因（企業者とその機能）の役割が出てこない，ということについては Redlich〔12〕参照。レードリッヒは当時の世界観ないし歴史哲学と有機的成長＝自動的蓄積の図式との間の関連を指摘し，シュムペーター的企業者の認識が，ベルグソンの「創造的進化」の哲学によって初めてその途を開かれたと主張している。

ーはマルクスとは全く別な資本主義進化のヴィジョンの上に立っており，かれは資本家と労働者とが常に闘争関係にあるということを否定し，また抑圧され，弱体化された階級が創造的変革を遂行する能力を所有するものとは考えなかったのである。かれの資本主義過程における体制の論理の演技者はあくまで，変革の主体としての「企業者」であったから，かれの社会階級の理論においては，これらの企業者を中核とするブルジョア階級がいかにして生成進化したか，またかれらの階級的行動を規定するものはなにか，といった事柄が考察の中心とならなければならない。そしてかれは，その生成と発展・没落の歴史的プロセスが資料的に明確に跡づけられうるドイツ中世の封建貴族階級を典型的な事例として取上げ，この階級の興亡の歴史の実証的探究の中から階級現象の動態的過程一般に関する本質的要因を抽出しようとした。このようにして得られた階級現象の説明の原理，或いは「説明的」仮説はまたブルジョア階級にも適用され，後者は前者とのアナロギーにおいて説明される。つまり，かれは「指導力」の原理にもとづく階級形成の単純なアプリオリと，中世封建貴族と近世資本家階級との比較制度史的な実証的，歴史的研究との相互作用の中から，階級現象の動態一般に関するいわば純粋モデルないし理論を設定し，この理論を援用することによって，これらの階級（或いはすべての階級）が原理的には同一の生成，機能，衰退のプロセスを辿ることを社会学に分析記述しようとしたのである。

かくして，シュムペーターの社会階級の理論は，変革＝革新と指導力とを結びつけることにより，社会的発展を支配するものとしての指導者階級とその機能の問題に焦点が当てられていて，階級現象全般にわたる静学的精密理論の完成された体系を提示するものではない。したがって，かれの『社会階級論』では，「人種的に同質的である環境内」での社会諸階級という限定が加えられることにより，現実の階級現象を説明する重要な原因である人種的差別は外的要因として考察の範囲外におかれている。かれはそこで，『発展の理論』の場合と全く同様に，「はっきりと限定された一連の問題と，それ

に対応する解答とを，できるだけ簡潔に，また率直に提示する」(Schumpeter〔14〕S.149, 邦訳169ページ）ことを期したのであって，階級と呼ばれる社会現象の中，いわば静態的理論に属する問題――社会全体の生活過程における階級の機能や，社会生活全体を作り上げる階級関連の問題など――は取上げていない。問題は「階級形成」の本質に属するもの，すなわち，「社会全体は何故に，またいかにして，われわれの見る限り，……昔も今も同質的であったことがなく，常にこのような明白に有機的な階層化（Stratifikation）を提示しているのか」（*ibid.* S.151, 172ページ)という事柄の解明に限定される。そして，歴史的に与えられた階級構造の具体的な原因や条件には立入らない。たとえそれが外見上，いっそう重要な直接的な原因であるように見えようとも，それらの条件は純粋理論には関係がなくて，それは結局基礎的要因にまで還元されるか，それとも長期的に見るとき，事柄の本質を変えるものではないことが明らかになるのである。

このような階級現象に対するアプローチをとる場合，シュムペーターの階級概念には次のような特色が見られる。まず，かれの社会階級は理論的に構成された範疇，たとえば古典派経済学において見られる地主，資本家，労働者のごとき「研究者の創造物」としての階級ではない。経済理論によれば，経営者も日雇労務者もすべて賃金取得者である限り「労働者」の範疇に属すべきものであるが，それはわれわれの階級概念ではない。かれの場合，階級はそういった抽象的範疇ではなくて，「われわれが観察するけれども，創り出すのではない社会的実体」を指している。「この意味におけるあらゆる社会階級は特殊な生活体であって，かかるものとして行動し，苦悩し，かつかかるものとして理解されることを欲するものである。」（*ibid.*, S.149, 170ページ）

次にかれは，予め階級に関する厳密な定義づけから出発しようとはしなかった。階級は生きた有機体であるから，その定義は設定された問題への解答とともに明らかになるのであって，これにアプローチするにあたり差し当り

必要なのは，それぞれの場合に「ある社会階級を認めてこれを他のそれから区別することを可能にするような特徴」(*ibid.*, S.151, 173ページ) に限られている。ここではただ，階級とは「みずからを全体として自覚し，かかるものとして純化され，それ自身の特有の生命とそれに特徴的な〝精神〟とを有するあるもの」(*ibid.*, S.152, 173ページ) と言えば足りる，とかれは言う。かくして，シュムペーターによれば，階級現象は次のような「本質的特性」——この特性自体が階級現象の「結果」であり，またその「中間的な原因」でもありうるのだが——を持っている。すなわち，ある階級の構成員は他のそれに比較して異なる行動タイプを持ち，相互に緊密な関係にある。「かれらは同じ資質の眼でもって，同じ見地から，同じ方向に，世界の同じセクターに向かって目を向ける」のである (*ibid.*)。

シュムペーターは階級現象をまず大まかに，こういった同じ精神と行動タイプ・関心を有するグループとして規定し，これを全体社会との関連において，階級が社会過程の中で実際にいかにはたらいたかというその作用，はたらき，そしてそのはたらきの持つ社会的意義に注目した。これはT・H・マーシャルが，不毛と誤謬とのもとになる定義の詮索を回避し，「階級」という言葉を単に研究の一般的方向を示す「道しるべ」として，これに関連した現象を，社会分析にとって意義をもつ同一性と相違とにもとづいて分類する，という行き方を提唱した立場と一致するものである。(4) したがって，シュムペ

(4) Marshall〔6〕p.88. マーシャルはこういう方法の有用性を強調して次のように述べた。あるそれにふさわしい社会を取上げ，比較によってそれがテストされるまでは，その現象の普遍性についての判断を差し控えなければならぬ。そして特殊な事例の分析は，それが基本的な社会的機能と社会関係との関連において解釈されるならば，一般的な適用の可能性を生むかもしれない (*ibid.*, p.89)。こうしてかれは現代イギリスを対象として「社会階級」を取上げ，言葉を定義するのでなくて事実を記述し，それを「単純な概念に，基本的な社会的原理に分解することによって」記述しようと試みたのである。

こうしたマーシャルの社会階級理論は，歴史的な関心とパースペクティヴから切り離されて，社会に関する精密的，静学的一般理論——個人間の関係や集団の構造，決定作成機構の分析等々——に専心してきた現代の（とくにアメリカの）社会学者から，時代おくれの社会学のタイプの一例として批判されていた。1960年代になっ

ーターは階級と「身分」とを格別区別することなく，また「階層」との間の厳密な定義的区別に関心を示さなかった。「身分」は封建的国家体制との関連においてのみ意味をもつある種の階級現象であり，また階級は階層化の特殊の場合にすぎない。(5) シュムペーターによれば，階級現象という社会学的与件は，封建的＝軍事的経済体制を通じて作用する場合と，資本主義の経済体制を通じて作用する場合とでは，歴史的に異なるプロセスを生むけれども，この現象の本質そのものには変りはない。かれは異なる環境的条件の下における階級現象の動態に見られる本質的同型性を把握しようとした。

この場合注意すべき事柄は，たとえば「所有」という概念を取上げるとき，それは社会の歴史的，文化的段階によって全く異なるものであるから，

て，経済発展＝開発理論の展開に促されて，社会的発展の問題が社会学プロパーの分野において勢を占めてくるとともに，アメリカ社会学においても歴史的，比較的社会学の復興が見られるようになってきた。そして，前科学的時代の社会学と見なされていたコント，スペンサー，トックヴィル，ウェーバー，パレートなどのような歴史的＝比較的社会学への関心が高まり，マーシャルの社会学的労作がふたたび関心の的となりつつある（Introduction by S.M.Lipset to Marshall〔7〕）。このようなマーシャルの，予め「一般的理論」を構成するよりも，「特定の構造に適用しうる一般化」を求めるといった方法（*ibid.*, p.xvi）こそは，まさにシュムペーターのそれに他ならなかったのである。

（5）ウェーバーは階級を「財産階級」と「営利階級」と「社会階級」との三つに分類し（Weber〔25〕S.177），階級と身分との相違を次のように述べている。すなわち「営利階級が市場中心の経済を基礎として成立するのに対し，身分はすぐれて，団体の欲望充足が独占的・徭役納貢義務的，或いは封建的，或いは身分的・家産的に行われる場合，それを基礎として成立し存続する。社会構成がすぐれて身分制の原理にもとづくとき，その社会を〝身分的〟と呼び，社会構成がすぐれて階級の線に沿って行われる場合，これを〝階級的〟と呼ぶことにしよう。〝階級〟の中〝社会〟階級は〝身分〟と最も近い関係にあるが，営利階級はこれと最も疎遠な関係に立つものである。身分の中核はしばしば財産階級によって構成される。」（*ibid.*, S.180）またかれは「社会階級」については，「それらの階級の間で，一般に(イ)個人的にか，(ロ)幾世代にわたって地位を代えることが容易にでき，しかも定型的に行われるのが常である場合，それらの階級的地位の総体を称して社会階級と言うことにしよう。」（*ibid.*, S.177）と述べたのち，これを(イ)労働者全体，(ロ)小市民階級ならびに無産の知識人および専門職に分けている（*ibid.*, S.179）。ウェーバーが財産階級と営利階級とを区別したのは，「企業者」とブルジョア階級との関係を十分に把握していなかったためだと思われる。この点さえ別にすれば，ウェーバーとシュムペーターとの階級概念に大きな開きはないと言って差支えあるまい。

必ずしも同じ基本的概念を意味するものではない，ということである。そこから，概念の用い方における細心な配慮が要請されなければならない。にも拘らず，かれは「さまざまな形態の中に同一の本質を探究する」(*ibid.*, S. 154, 176ページ) という分析作業をもって，かれの経済学ないし経済社会学における主要課題と見なしていた。(6) 所有権の形成に関する理論，景気循環の理論，企業ないし企業者に関する理論，などはすべてかかるものであって，「階級現象」に関する概念もまたこういうケースの一つなのである。人が特定の意味の「階級現象」について語ることができるのは，「社会的重要性における集団的な相違が，たとえさまざまな環境と条件との下におかれているにしても，いたるところで見ることができ，またどこでも同じ説明根拠によって理解しうる」場合でなければならない (*ibid.*, S. 154, 177ページ)。それは単なる「作業仮説」ではなくて，むしろ「結果を先取りした表現」にすぎない。というのは，「それはこういう説明根拠の立場からしてのみ意味をもつ」からであって，そこに歴史的社会学におけるいわば「記述的」モデルの特色が見られるのである。

シュムペーターの階級理論へのアプローチのいま一つの特色は，かれがある特定の社会の階級の「機能とその運命」，また階級交替という事実の観察から，「一切の階級形成を説明し，その本質と生命法則とを包含する諸原理」を引出そうとしたことである (*ibid.*, S. 157, 191ページ)。かれは『発展の理論』においては，静態的な循環的流れの経済を前提として，そういう状態から動態的発展がいかにして生起するかを問題とした。これに対して，社会階級の理論では，「無定形な社会」すなわち「階級現象の欠如が異論なしに証明しうるような社会」が存在しない——この現象の目立つ度合に強弱はあ

(6) シュムペーターはシュモラーが企業形態の歴史的継起について究明したことをもって，かれの社会経済史に対する大きな貢献であると考える。かれは「さまざまな文化形態の下での基本的な同一性を認識した」最初の経済史家の一人であった。「13世紀のドイツ商人ギルドと近代的カルテルとの同一性の確認」(Schumpeter〔19〕p. 229n.) のごときはその一例である。なおこの点につき Schumpeter〔21〕を参照。

ったにしても――ところから，無階級社会から出発して階級の形成を説明することはできない（*ibid.*, SS.156f, 179ページ以下）。マルクスの階級理論はこの点で躓いたのである。けれども，価値の分析の場合，使用価値から費用価値へ，そして再び使用価値へと無限の循環をくり返すように見えるにも拘らず，価値と価格との一般的相互依存関係の下で，この問題に関する包括的な説明原理が見出せるように，階級の問題についても同様にして，無限の遡及と出口のない循環の中に閉じこめられることにはならないであろう，とかれは考える。つまり，特定の社会の階級現象を手がかりにして，階級相互の，また階級を構成する成員の地位の変化という事実の観察から，階級形成の説明原理やその本質と生命法則とを包含する原理を求めることが可能なはずである。ただし，その場合，こういう変化を説明する諸契機が同時にまた，階級一般が存在するところの原因をも包含するものでなければならない（*ibid.*, SS. 157f.）。かくしてシュムペーターは，『発展の理論』において，発展の諸原因を問題にするのではなくて，発展の生起一般とそのあり方を定式化したように，階級形成の理論の場合にも，階級的分化の原因として軍事的征服とか，富の相違，機能的分化，或いは分業といった個別的要因を列挙するといったやり方ではなくて（Ginsberg〔2〕p.173），階級現象の歴史的，具体的探究の中から，階級形成一般の〝あり方〟を定式化する単純な「説明的仮説」を提示しようとしたのである。

問題は，そもそも階級現象の本質はなにであるか，すなわち，ある与えられた時点に階級の内部において家族が階級的に序列づけられているのはなぜか，またなぜ時の経過とともに家族の地位は変化するのか，或いはまた階級自体の地位が変化するのはなぜか，ということであり，さらに諸階級はなにゆえ，固定された社会的形態では決してなくて，時代とともにその内容が変化するのであるか，ということである。シュムペーターはこういった観察されうる現象の究極的基礎が，個々人の「適性」とその社会的分布との中にあると考えた。しかし，かれの言う適性の差違は「肉体的個人の適性の差違ではなく

て，一族ないし一家の適性の差違」でなければならない（Schumpeter〔14〕S. 205，250ページ）。個人は常にある一定の階級状態の中に生れるのであって，こういう客観的な階級状態は個人の意欲や行動とは別個な，それに対立したもので，しかもその出発点と可能性とを限定するものである。それは個人の運命にとっても，こうした運命のもつ社会的成果の観点からも，階級的な構造の存在の重要な結果として観察されうるものなのである。個人が特定の階級に所属するのは，かれが特定の氏族ないし特定の家系に所属する者としての特性においてであるから，真の階級の構成員は氏族ないし家系に求めなければならない（*ibid.*, S. 158，183ページ）。シュムペーターは階級の単位が「肉体的な個人」ではなくて，「家族」であるとした点でも，T・H・マーシャルの見解と一致していた ——もっともマーシャル自身はこれを否定したけれども——のである（Marshall〔6〕p. 97）。

Ⅲ 社会階級の形成と衰退

ところで，階級現象に関する第一の問題は，一定の階級状態が与えられていると仮定して，その階級内において家族の地位に上昇と下降とが見られるのはなぜか，ということである。シュムペーターはこの現象を，ホーヘンシュタウフェン時代のドイツ貴族と高度資本主義の時代の産業ブルジョアジーとを例にとって，次のように説明した。この時代のドイツ貴族は領主的階級と騎士的城主階級との二つに分かれていたが，その初期においてすでに富と威信とを高めた家族があると同時に，他方では零落し，貧窮化したものが存在する（Schumpeter〔14〕S. 155，186ページ）。産業ブルジョアジーについても事態は同様であって，ナポレオン後の時代のみについて見ても，この期間の初期にも終りにも，ブルジョア階級に属していた家族の相対的な地位が著しく変化している。〝大なるもの〟はますます大に，〝小なるもの〟はますます小に，というのではなくて，まさにその逆が特徴的なのである。一般的に言って，19世紀の中頃に上位に立っていた家族はもはやその地位にはなく，

今日最も成功したものは当時資本家階級には属していなかった。こういう事実は「競争経済」（或いは競争的資本主義）の時代における私的個人企業の場合に最も明白に見ることができる（*ibid.*, S.163, 190ページ）。こういった事実はいかにして説明されるであろうか。

まず第一に考えられる理由は，ひとたび地位が高まるとその地位が自動的にますます高まる，ということである。けれどもこれは上昇の事実を前提としていて，地位の隆替そのものを説明することはできない。マルクスは階級現象を蓄積の自動作用の中に解消したけれども，かつて成功したブルジョア家族の衰滅は，それが事実に反することを証明している。自動的昇進という契機はそれゆえ，単に結果であるか中間的原因以上のものではありえない。次に，第二の理由として，その時々の地位を抜け目なく活用するという，世才にたけた生活態度が大きな役割を果たすということがある。結婚政策とか，経済的チャンスの活用とか，封建制度内での家族の地位を利用して近隣の諸侯を服属させる――これは困難な課題であるが――ことなどがそれである。ブルジョア階級の場合には，家族によって異なる貯蓄性向がとりわけ，その与えられた地位を強固にするうえに役立つであろう。

けれども，第三に，最も重要な役割を果たしたのは，封建的上位者に対して個々の家族が挙げた功績の相違ということであった。それはほとんど例外なく戦争上の功績である。そして第四に，自己の責任において戦争を引起し，それに成功することが家の地位を高めたのである。けれども，逆にそれに失敗するとその家族は没落していく。この事実は後の時代の君主領の生成とその後の運命において，最も明白に看取することができる。競争経済における個人企業の場合では，私有財産の契機と，家族の成功が家族企業の成功と一致するという事実が特徴的であるから，かれらの地位の変化は，企業家の「能率」上の差違によって説明することができる。それはまず，既存企業の運営における技術的，商業的，行政的指導の機敏さの違いの中に見出すことができるであろう。「冷酷なほどの厳格さ，営利への志向，権威，卓越し

た活動能力，きびしい克己心」といったものがこういう違いのもとをなす行動態度をなしている。さらに，〝限界を越えていくこと〟(*Weitergehen*)，すなわち企業の拡大の場合になると，個々の家族の産業上の成功における差違という第四の理由が加わってくる。これはシュムペーターが『発展の理論』においてとくに強調した，既存の企業の運営に対して新しい企業を創造する場合に当っていて，それは革新的な「企業者」の本来の課題である。新生産方法の導入や新市場の開拓など，「革新」＝「新結合」一般の遂行は，これに必要な特殊な能力ないし「適性」の持主でなければ成功することはできない。しかも，新しい潜在的な可能性を見出す「洞察力」と，あらゆる環境からの抵抗を排除し断乎としてこれに着手する「決断力」，すなわち「企業者能力」の持主はきわめて少数であり，成功者よりも失敗する者の方がはるかに多いという事実が，革新の成功から得られる巨大な利潤の存在を説明することができる。こういう利潤が産業財産形成のもとになったことはもはや説明を要しない。そして，封建貴族の場合，戦争という冒険ないし事業における成功が同様な意味合を持つということもまた，明らかであろう（*ibid.*, SS. 160—166, 185—195ページ）。

このように見てくると，同一階級内部での家族の地位の隆替を説明してきた諸要因は，すでに階級線を越えての家族の上昇と下降とを説明するものであり，さらにそれが集団的に行われる場合を考慮するならば，われわれはすでに階級形成の現象にまで迫っていることが明らかになるだろう。比較的短期間の問題を考察している限り，階級という障壁は越えがたいように見えるかもしれない。けれども，これを長期にわたって見るならば，同一階級に属する家族の運命は別の形像を呈することが看取されるのである。一般に階級間の障壁は乗り越えがたいというのがマルクスの階級理論の原則であり，われわれもまた半ば無意識にこれを公理として受け入れてきたように思われる。ひとたびある階級の中にはめ込まれた個人は，その階級状態によってかれの活動の可能性に限界がおかれるのがふつうである。事実，肉体的個人にとっ

て自分一人の力で上位の階級への上昇を成し遂げることは原則として不可能であり，また圧倒的な多数の場合，一生の間に，階級を構成する真の個体である家族の階級的地位を決定的に変化させることはありえない，ということはシュムペーターもまた承認している（*ibid.*, S.170, 201ページ）。にも拘らず，現実にそういう事例が少数でも見られる場合に，これを「基本的に重要でない」例外的事象と見なすことは許されない，とかれは主張した（*ibid.*）。

階級間の障壁を越えての家族の移動は，これを長期的に見て，個々の家族の家系を辿ることによってその存在を確認することができるならば，それが事実であることが証明されるであろう。シュムペーターはこういう記録が資料により知ることの可能なケースとして，ドイツ高級貴族の場合を取上げて考察した。ドイツ人が史上に現われたときには，すでにかれらの中に社会階級の特徴をもった高級貴族の存在を知ることができる。バイエルン人の場合，その家族の名前も判明している。そして，高級貴族そのものはずっと後まで存続したけれども，これらの家族の名前は消滅し（或いは従士の地位にそれに類似した名前を残し），新しい家族がこれに加わった。11世紀以降しばらくの間，高級貴族と下級貴族の区別がはっきりと記録されているから，階級交替の状況はいっそう明白である。13世紀になると自由民と不自由民との間の境界がぼやけてきて，かつて不自由民の従士であった家族が高級貴族に昇進していることが確認できる。15世紀になると13世紀の高級貴族に属した家族はほとんどすべて消滅するか，その地位が下ってしまった。階級的地位が安定して，階級間の隔壁が高くなった15世紀以降においても，ドイツ系オーストリア貴族はほとんどもっぱら従士〔取立て騎士〕の出身であった。領主に対する役務において成功を収めたものは高級貴族への途が開かれ，高級貴族はたえず騎士階級から補充されたのである。と同時に，この騎士階級はまた，11世紀にはまだ農民から補充されていた（*ibid.*, S.172, 204—6ページ；Bloc〔1〕p.288）。

われわれにとって最も興味が深いのは，産業家の家族がどの程度まで直接

労働者から補充されて，その上層部分を形づくっているか，という問題である。この問題の解答には簡単なアンケートで十分なので，われわれはこれをイギリス綿業に関して調査を行ったチャップマンに負っている。その結果によれば，かれ自身労働者階級から成り上った企業者その他の指導者の比率は，63%から85%の間にあるという。この調査は不完全なものであったにしても，シュムペーターの議論の目的からすれば，このような高い比率は必要ではなくて，10パーセントという数字で十分である。もし残りの90%のものについて，その祖先が他の階級から成り上ったという同様な証明がなされるならば，かれの目的にとっては十分なのである（*ibid.*, S.174, 207—8ページ）(7)。産業界における家系の基礎資料はきわめて乏しいけれども——シュムペーターはこういう家系資料によらなければ，資本主義社会の構造や生活過程に関する信頼するに足る知識が得がたいことを強調している——，乏しい資料をもとにして一般的に言いうることは，「三代にして仕事着から仕事着へ」というアメリカの格言——わが国でも「親が苦労，子供は楽，孫乞食」という意味の諺がある——の示す事態が，産業界における階級交替の現象をよく言い現わしているということである（*ibid.*）。

かくして，シュムペーターによれば，短期的には同一の家族からなるように見える階級も，十分長期的に見るならば，階級自体は存続していても，その内容をなす家族は全く別なものになり，ある時期を過ぎると同一の階級が全く異なる家族の集団になってしまう。こういう階級間における垂直的移動の可能性の難易は，時代と社会環境とによって著しく異なるにしても，それは例外的な事象ではなくて，階級現象の原則なのである。そのプロセスは常に進行していて，あらゆる階級はその集団的生命が存続している間，「常に満員ではあるが，いつも別な人たちで一杯のホテル或いはバスのようなものだ」

（7）A．マーシャルはウォーチェスターにおける主要産業の製造業者の起原について，その90%が日雇職人の出身であることを示す資料を引用して，あのアメリカの格言に関説している（Marshall〔5〕p.621n.）。

(*ibid.*, S.171, 203ページ; 〔16〕408ページ) とかれは言う。ただその場合，注意しなければならないのは，こういう階級間での個々の家族の出入は，「いわば団体的に行われる」つまり「階級的な，個々の家族とは独立した，……かれらの立場から見れば〝客観的な〟事象である」という原則からはずれるものではないにしても，「各家族の出入は個別的に実現されるというのが原則であり原理である」ということである (*ibid.*)。

ところで，残された問題は，一国民の階級構造はいかにして形成され，いかにして変化するかということであり，すなわち階級それ自体の形成と衰退との問題に他ならない。シュムペーターは同一階級内における家族の地位の変化から出発して，それを説明する原理が異なる階級間における家族の垂直移動をも説明しうることを明らかにした。ここで階級内での家族の地位を，社会の内部における階級の地位におきかえるならば，一国の社会構造における階級の社会的地位の変化をも同様にして説明することができるであろう。そこからかれは，封建社会における社会構造が階級間の社会的地位の相対的変化によっていかに変化したかを観察し，階級自体の興亡隆替がいかにして生ずるかということを問題として取上げた。資本主義社会におけるブルジョア階級の運命は，そのプロセスとのアナロギーにおいてこれを解明することが可能である。

階級自体の社会的地位の変化が最も明白に見られるのは，ある社会集団が他のそれによって征服される場合である。この場合，「征服される」ということは「支配階級の失敗」を意味するものであるが，こういう失敗はわれわれの問題にとってなにを意味するか。支配階級が失敗によってその地位を失うことのもつ意味を探ることは，階級自体の運命を解明する糸口を与えるであろう (*ibid.*, S. 181, 216—7ページ)。

シュムペーターは，社会階級の隆替についても，その階級が社会において果たす役割の重要性と，その役割を果たす場合の成功の度合とをもってその現象を説明する基本的原理であると考えた。「あらゆる階級は常にかつ例外な

く，ある特殊の機能と結びついている。」そして，「ある階級の社会的序列とかれらの機能との間の関係」がこの問題に解決を与える鍵をなす（*ibid.*, S. 181, 217ページ），とかれは言う。それは階級現象に関する職分ないし分業理論の中核をなすものであるが，かれはそういう理論をその説明に不適切なものとして排除した。かれのいう社会的機能は，単なる職分や分業とは全く違った次元において考えられねばならぬものだからである。

「あらゆる階級にとって特定の機能があって，かれらはみずからの理念と立場に従ってこれを果たさなければならず，また階級として，その構成員の階級的な行動によって，実際にその機能を遂行している。そして，国民全体の構造におけるあらゆる階級の地位は，一方においてこういう機能に与えられる重要性によって，他方において階級がこの機能の遂行にあたり成功を収める度合によって，左右される。それゆえ，階級相互の地位の変化はその都度，この二つの点における変化によって説明されるのであって，その他の事情によるものではない。」（*ibid.*, S.182, 218ページ）

階級現象を支配するこのような命題に従って，シュムペーターはゲルマン人の場合における封建貴族の生成と発展とを次のように説明している。

史上最初に姿を現わしたゲルマン人は騎馬遊牧民であり，その中の貴族階級は比較的流動的性格をもつ指導者層といった性格のものでしかなかった。騎馬遊牧民は一般に，急激に変化する環境の中で生活しており，常に新しい状況に直面して選択し，決断し，勝利を収めなければならないから，それは当然に有能な指導者の存在を要請する。(8) けれども，指導者の地位の分化と確立とは，それだけではまだ階級構造を示すにはいたらない。ゲルマン人の場合に見られる基本的な相違点は，かれらがまた農耕生活を営んでいたことである。そこでは遊牧的生活の場合に比較して，指導者と被指導者との間の階

（8）これに反して，階級的指導性の生れてくる機会のなかったケースとして，プリペット沼沢地に住んでいた頃のスラヴ人がある。かれらは困難な地勢によって相互に隔離された小さな共同体に分かれ，民族内部での新しい可能性にも乏しく，安定した生活をしていた。こういった静態的な生活環境の中では指導力のもつ意味がなくて，したがって，目に立つほどの階級的差別ないし社会的分化が生じなかったのである（Schumpeter〔14〕S.182, 218ページ）。

層分化が複雑となり，本来の武力的機能に漸次他の機能が加わってくる。つまり，両者の間の区別に「新たな区別がつけ加わる」ようになるのである（*ibid.*, S.184, 221ページ)。それゆえ，ゲルマン人の貴族は当初から，「はっきりと限定された特殊な機能」をもって現われた。それはすぐれて「戦士的指導の機能」として特徴づけることができる。戦争が日常の生活様式であった当時の社会環境において，戦士としての機能の持主の「一般的な地位」の上昇が見られ，それが他の社会的諸機能と結びつくことによって，かれらの階級基盤をいっそう強固なものにしたことは疑問の余地がない。このようにして，貴族階級の地位の上昇ないし階級相互間の地位の変化は，この階級の機能の社会的重要性が高まり，次にこの重要性が民衆の間に意識的，無意識的に感得され，承認されたという事実にもとづく。第一の事実は社会集団の客観的生活条件との結びつきを表わし，第二の事実はこれらの生活条件とそれから生れた現象との間の生きた連繋を意味するものであって，いずれも社会階級の現象の特性を示す基本的事実に他ならない。(9)

シュムペーターによれば，こういう基本的機能の重要性の増大は，「ゲルマン人が新しい領土に最後に定着した過程において，大土地荘園制度の成立の中に反映されかつ客観化されており，その社会的意味はまさにその中に存在している。」（*ibid.*, S.185, 222ページ）つまり，荘園制度は一個の行政的管理組織であって，基本的には，土着の土地共同体の上に上層定着した古代ゲルマン人の貴族的支配関係にもとづく構造変化として把握することが可能なのである。(10) それは「国民のさまざまな階級の間における〝生産関係〟が，征服

---

(9) T. H. マーシャルは社会階級の特性として，(1)それがヒエラーキーとしての社会的階層化を示すこと，(2)それは社会的承認を必要とすること，(3)集団化におけるある種の永続性のあること，を挙げている（Marshall〔6〕pp.90f.）。

(10) シュムペーターは荘園制度の成立をめぐる事情につき次のように述べている。「大土地荘園制はカロリンガ朝になっていわば突如として現われた。そこから人は直ちに，深刻な社会変革の過程があったと考える。この点はすべて見せかけの問題にいつも見られるように，解決が手に負えぬため，往々にして，巧まざる滑稽さを免れないようなやり方で論証が行われたにすぎない。〔邦訳では意味が反対になってい

者であるチュートン種族の政治的（軍事的）組織によって強制されたものであった。」（Schumpeter〔17〕p. 288）とかれは言う。この点に関して注意すべき事柄は，右の場合，農業生産構造が階級構造を決定したのではなくて，逆に生産関係は階級構造への適合関係において受動的に形成されたということである。これはマルクスの経済的歴史解釈の図式に全く適合しない事態であった。貴族制支配の基盤としての村落共同体の構造が重要な条件をなすことは明らかである。けれども，本質的な契機はあくまで，新しい社会に導入された古代ゲルマン種族の特殊な貴族制支配であり，この貴族階級の構造とその本質の理解が，封建制度成立の事情を解明する鍵をなしていることは疑いない。(11)

封建的貴族階級が近代初頭にいたるまでその支配者としての地位を上昇させ，かつ強化させていったことについては，ほぼ次のような原因を挙げるこ

る〕事実は，そこにはただ，そういう変革とは独立に生成し，それ以前にわれわれの諸要因によってすでに変化していた階級構造が，受動的な形で，憲法や行政管理——というのは，荘園制度は封建制度と同様に，その側面から見れば，特殊な外的環境やその時代の特殊な階級構造に適合した管理方法の表現に他ならないのだから——，法制一般，ならびに自然的生産手段の支配の——他の場合にはそうでないにしても，この場合には受動的な——形成の中に刻印され，一歩一歩貫徹された過程が見られるにすぎない。大荘園制度が確立され，この制度に関する当時の観念に適合した生活形態や，一切の国民的諸階級に関する法律大系——従士制，不入権，領主裁制権，村落権，等々——が完成されてから，そこに大きな社会過程が始まり，それはしばしば動揺したり退潮したりしながら，荘園的特権の完全な廃棄にいたって初めて，したがって19世紀になって初めて終結したのである。」（Schumpeter〔14〕SS. 185—6，222—3ページ）

(11) 筆者は，この点に関して発言する資格を全く欠くものであるが，シュムペーターの見解はその大筋において現代史学の研究成果とも一致しているように思われる（Bloc〔1〕；鈴木〔23〕など）。たとえば高橋教授によれば，封建社会においては，その身分〔階級〕的構成は「軍義的階層序列機構に対応した」ものであって（高橋〔24〕84ページ），そこでは階層形成の原理は軍事的指導力に求められなければならない。しかも，かかる社会構造を基底とする領主制支配＝経済外強制は，「封建社会を全体として維持し，封建社会のかかるものとしての再生産を媒介する源基的なものである。」（同上）という。いずれにしても，われわれにとって重要な点は，封建社会の階級構造は経済過程から派生したものとして理解することはできず，それは軍事的指導の社会的機能にもとづく階層序列として理解しなければならぬ，ということである。

とができるであろう（〔14〕SS. 186ff., 224—26ページ）。まず第一に，「この時代全体を通じて戦争が本質的に……生活形態としての性格を有していた」ことがそれである。戦いや戦いのための武器の準備は，典型的な社会生活の状態において，生き残るための諸条件の中で最も重要な，不可欠な要素をなしていた。自分でそれができぬものは個々の戦士的主君の保護に頼らなければならない。(12) さらに，第二に，この階級の機能のもつ死活的重要性の下で，戦士が完全装備の騎馬兵として専門家になったことが，かれらの階級的地位を高めたいま一つの原因である。（すべての人が戦士であることをやめて，武士と経済人とに分かれたことが階級分化の始まりであるが，それは今や完全なものになった。）マルク・ブロックも述べているように，「戦士の最高階級のしるしは，馬と完全な装備との結合であった。」（Bloc〔1〕p. 290）しかもかれらは「身心ともにこの特殊な機能——戦士のそれ——に捧げていた」（*ibid.*, p. 289）から，かれらがその機能を十分に果たすためには，たえず技術の練磨に没頭することが必要であって，「こういう貴族の使命が直接経済活動にたずさわることを妨げた」（*ibid.*）のである。この事実こそ中世封建制度の形成における軍事的従臣の役割を説明する基本的な事実に他ならない。そういう従臣の一団に経済的基礎を与える必要が，「知行体系の軍事的起原とその正当化」を説明するのであって，封建制度はまさにこういった必要から生じたと言うことができる（*ibid.*; Schumpeter〔15〕S. 104, 89ページ）。いずれにしても，知行制度ないし荘園の保有がこの階級の地位を高め，かつこれを強固なものにしたことは疑問の余地はない。このことはまた，ある種の生産手段の所有が階級形成に寄与したのではなくて，別な理由ですでに選

(12) 封建制度ないし「領主制」（Seignorial system）——「領主=農民制度」——においては，領主と農民とは相互に必要であり，また土地はこの両者にとって必要であった。そして，この制度は現実の必要に応えたがゆえに強力であった，とヒックスは言う（Hicks〔4〕p. 102）。農民は領主にとって自己の経済生活を支えるために必要であり，領主は農民にとって，それがいかに大きな負担になったにせよ，必要であった。かれらはその代りに何物かを得たのであり，「かれらが得たものは〝保護〟に他ならなかった」（*ibid.*）のである。

ばれた者に対して経済的諸手段が与えられたのだ，ということを明らかにする。

最後に，階級的地位を高めた第三の根拠として，はじめ副次的機能にすぎなかったものが，時代環境の下で基本的機能との結びつきを保持しつつ，さらに拡充されて行ったことが挙げられる。民族的視野や利害や課題が大きくなり，それは上層階級にとってしか現実性をもたなかったにしても，帝国をめぐる大きな問題が生じて，かれらの活動と権力との新しい源泉となった。この場合，戦士としての基本的機能はこれらの新しい機能と結びついており，その適性はこの機能の遂行に必要であった。これらの他の分野における活動が，高級貴族の戦士的活動に類似したものであったことは，たしかに重要である。けれども，基本的な問題は，「決定し，命令し，指導し，勝利を収める」ということこれであり，貴族の中の多くの者はこれをなす「能力」と「意欲」とを有していた。そして，かれらの中から後の時代の高級貴族が生れたのであって，かれらこそ騎士階層全体の地位を維持しかつ高めることができたのである。ただ経済活動はかれらには無縁のものであり，戦士的貴族は商人となることはできなかったし，またその意欲もなかった——後になると，特定のやり方でそういう事情は変化したが。これが封建的階級構造の中からブルジョアジーが出現した事情を説明するのである。

封建的貴族階級の解体の過程に関するかれの所論は，シュムペーターの階級現象の説明の中で最も興味の深い部分である。（後に見るように，ブルジョアジーの解体も同じ原理にもとづいて説明される。）この階級は14世紀以来たえ間なく下降をつづけて今日に及んでいるが，その間かれらの法律的地位が低下したというのではなくて，それはむしろ15，16，17世紀を通じて高まりさえした。これは社会生活の他の要素の中で，法律や習慣などの「上部構造」が社会生活の変化から取り残される，という一般の観察と合致するものである。

シュムペーターは貴族の本質の喪失とかれらの階級の衰退の過程——ウェ

ーバーによって「官僚化」の歩みとして把えられたこの過程――を，かれ独自のやり方で，広義の「家産化＝世襲化過程」として理解した。それは「官職の世襲化」，「荘園制土地所有の世襲化」および「人格の世襲化」の三つの過程からなっている（〔14〕S.191，229ページ）。かれは封建制度の完成とその成功の中にすでにその崩壊の萌芽を見たのであって，その根本原因は，社会環境の変化による貴族階級本来の戦士としての機能の「廃物化」――「企業者機能の廃物化」の場合と同様に――の中に求められる。「世襲化」というのは，官職や土地が相続され，かつ売買の対象とされるにいたったことであり，それは知行体系の崩壊を意味するものであった。そして，土地や個人が封建制度の義務や結合から解放されて，土地は私有地となり，個人はまた根本的に放任された，自己の私的領域を自由に形成する「国家市民」になっていき，封建制度とは別個な「国家的領域」へと移行して行ったのである（*ibid.*, SS.190f., 229ページ）。ロココ時代〔ロココはルキ15時代の芸術様式，1720～70〕というのがこの現象に関す最も啓発的な形像を与えるのであって，そこでは貴族の地位は外面的には華やかな姿できわ立っており，物質的にも封建時代の広大な遺産の上に立って強化されていたように見える。けれども，かれらは本質的には領主的地位を失って，「新しい国家機構」の付属物にまで成り下っていた。(13) 貴族の社会的，物質的地位は残りながらその機能は広範囲にわたって欠落を示したのであって，そこから，この時代の魅力と特徴的な高い文化が生れたことが説明されるのである。

これを要するに，世襲化による貴族階級の衰退の根本原因は，「武器をも

---

(13) 新しい国家権力の成立と貴族のこの権力への服属は，君主の側にとっても，もはや昔の「封建的君主としての資格」ではなく，「全く違った種類の権力的地位をもつ君主としての資格」における支配を意味していた。とりわけ新しく生れた「行政機構」においては，この機構の中で役職を占めた貴族が本来の貴族としてその役割を果したことを意味するものではなかった。（Schumpeter〔14〕S.190，228ページ）。この行政機構は貴族以外の者によっても同様に機能することができ，したがってそれは貴族の手から，さらには君主の手からさえ剝奪することが可能なのであり，事実剝奪されたのである（*ibid*; Weber〔25〕SS.735ff.）。

ってする肉体的な戦い」が一国の内外の生活形態ではなくなり，その結果，貴族の主要機能の礎石が取り払われたことにある。ある機能を常に行使することがなくなるならば，それはもはや「特殊の規律や志向が魂の内部にまで入りこみ，そのため階級全体にとって生活そのものになる」ということが不可能でなければならない（*ibid.*, S.193, 233ページ）。

「戦いが生活形態でないなら，あらゆる瞬間，あらゆる行為が武器を手にした，直接の個人的利益のための現実或いは可能的な戦いを意味しないならば，戦いはもはや偉大な課題，天賦の，自明な課題ではなくなるであろう。」（*ibid.*, S.194, 233ページ）

このようにして，「非戦士化と，その結果生じた他の関心事への志向」によって，貴族はますます「自己本来の基本的機能」すなわち軍役出仕をいとうようになる。これは「かれら自身によるその階級の基本的機能の放棄」を意味するものに他ならない。貴族階級の衰退の過程は，かれらの機能の「意識的な意欲の喪失による自発的な放棄」とともに，客観的な社会状勢の圧力によってその「習性と意欲」をも喪失することの中に現われた。そして「ひとたび放棄の過程が進行を始めたのちは，所どころで剝奪がこれに加わった。」（*ibid.*, S.196, 236ページ）とシュムペーターは言う。こういう変遷の過程は，貴族個人の解放の過程——人格の世襲化過程——であったと同時に，封建的諸関係の体系そのものの崩壊でもあったのである。

シュムペーターは封建的貴族階級という一つのケースを取上げて，次のような階級現象の説明原理に到達した。階級現象の究極の基礎は個人の「適性の差違」にある。(14) それは単なる適性ではなくて，その時々の環境の下で「社会的に必要な」機能の遂行に対する適性であり，この機能に対応した形

(14) こういった点でシュムペーターの階級理論が，モスカの『支配階級論』〔8〕やパレートの「選良の循環」ないし「階級循環」の理論の中にその先蹤を有することは明らかである（Pareto〔11〕）。とりわけパレートは，一切の価値判断や政策的勧告を回避し，事実と「同型性」とを追求した点で，シュムペーターの立場と完全に合致している。かれらはいずれも，社会が支配階級と被支配階級とに区別される

態と種類における「指導力」に対する適性でなければならない。[15] しかも「肉体的な」個人のそれでなく，「一族ないし一家」の適性の差違なのである（*ibid.*, S.204, 250ページ）。さらに具体的に言えば，この場合，「社会的に必要な機能」というのは，「所与の環境の下で，人々の所与の資質をも含めて，われわれ観察者が，社会的集団の生き延びるために必要だと考えるような，またその死活的重要性が集団自身によっても感得されているような，階級的活動ならびにそういう活動への志向」を意味している（*ibid.*, S.202, 244ページ）。もちろん，所与の歴史的状況において明確な機能はすべて「社会的に必要」なものであるけれども，指導者としての機能の判定の基準は，「階級の個々の構成員」がなかんずく「いかに余人をもって代えがたいか」という点に求められる（*ibid.*）。中世の個々の戦士は農民よりも「代えがたい」もの

ことを否定し難い事実として承認し，支配階級を構成する成員はある種の，人にすぐれた資質の持主であり，困難な仕事に堪えうる能力と野望，また人に認められる能力を有することをその特性と見なした。そしてモスカは，かれらの社会的機能が社会的諸力を指導することにあることを強調した。パレートは人間の社会が決して「同質的」ではなくて，異質的な人間を性格の程度によって測定するとき，それは「社会的ピラミッド」を形成すると主張する。かれは人間活動の各分野において，その能力のしるしを表わす指標（1，2……10など）を用いて，その最高の指標（たとえば10）を有する人々のクラスを「エリート」と呼んだ（*ibid.*, 2027—2031）。そして社会的均衡を解明するために，上位階層の中に「支配的エリート」と「非支配的エリート」を区別し，後者はエリートの中その名目のみを有して，真にその名に値する資質能力をもたぬ多数の者を指している（*ibid.*, 2034—35）。かれらの比率がグループ間の移動〔選良＝階級の循環〕と，その運動の速度を説明するのである。かれは選良循環の根本原因を，名目と実際の能力との乖離の中に見出した（*ibid.*, 2052）。パレートの理論はきわめて示唆に富むものであるが，かれは基本的な諸力の研究に専心したため，社会の全体過程の分析においてはなお不十分であり，その理論はむしろ静態的なものに留まっている。なお新明〔22〕参照。

(15) したがって，シュームペーターによれば，時代と社会とを異にするにつれて，指導力の社会的形態とそれのもつ意義も異なるということに注意しなければならない。ウェーバーは，社会的総過程の因果的説明の公分母となるものはないということを強調したけれども，われわれは歴史的過程の中に決定的要因の変化するヒエラーキーを認めることができる。歴史の各時期に対応して，他の社会的分野がそこに傾斜する構造的単位ないし制度的中心があって，それ自身のダイナミックスを有しているのである（Salomon〔13〕p. 600）。マルクスの「経済的」階級理論によってはかかる事態を把握することができない。

であり，したがって「より重要」であった。個々の産業家もまたより代えがたいものであるから，個人として個々の労働者よりも「より重要」でなければならない。そして，階級構成員の社会的重要性は，その機能の意義と，それを遂行する場合の成功の度合によって変化する。この二つの要因，適性と成功とは独立に，また実証的に観察しうるものではあるが，しかし前者は必ず後者を生むといったものではない。

われわれが歴史的経過を観察する場合，上述の基本的要因よりも別な原因の方がはるかに大きなはたらきをしているように見えるかもしれない。けれども，それは常に右の基本的契機に還元しうるのであり，実際の場合が理論的形像と異なるのは，もっぱら「惰性」の契機にもとづいて説明することができる。ひとたび強固に確立された地位は惰性によって存続するから，そこにさまざまな中間的事象が現われて，現実の歴史的経過を複雑なものにするのである（*ibid.*, S. 202, 245—6 ページ）。そういった具体的な歴史的過程は，基本的図式に他の要因を加えることによって容易に説明がつく。

かくして，シュムペーターによる階級現象の説明はこれを次のように要約することができるであろう。

「階級相互の地位の変化を説明する原因は同時に，またそれ自体，その根源的な序列を説明する。すなわち，それぞれの観察の出発点においてわれわれが出会う序列を理解させるものである。……歴史的時点における階級の地位の変化を究極において説明する，また各時点におけるそれぞれの階級構造を説明するこれらの要因はまた，階級的な構造が一般になぜ存在するのか，という問題に解答を与えてくれる。なぜなら，ある階級がその地位を得たり失ったりするのと同時に，それは一般に生成したり消滅したりするからであり，また個々の階級が生成したり消滅したりするからこそ，階級構造ならびにそれの変動が存在するのである。」（*ibid.*, S. 203, 246—7 ページ）

引用文献

〔1〕 Bloc, Marc, *Feudal Society*, 1961. 仏原典 *La societe féodale*, 2 vols., 1940.

〔2〕 Ginsberg, M., *Sociology*, 1934. Reprint, 1959.

〔3〕 Harris, S. E. (ed.), *Schumpeter: Social Scientist,* 1951. 坂本二郎訳『社会科学者シュムペーター』東洋経済新報社。

〔4〕 Hicks, J. R., A *Theory of Economic History,* 1969.

〔5〕 Marshall, A., *Principles of Economics,* 9th (Variorum) Ed., 1961. 馬場啓之助訳『経済学原理』4巻，東洋経済新報社。

〔6〕 Marshall, T. H., "Social Class - A Preliminary Analysis," *The Sociological Review,* January 1934. Rep. in his *Citizenship and Social Class and Other Essays,* 1950.

〔7〕 _____, *Class, Citizenship, and Social Development,* 1964.

〔8〕 Mosca, G., *The Ruling Class,* 1939. 原典 *Elementi di scienza politica,* 1923.

〔9〕 大野忠男，"シュムペーターと経済社会学の根本問題"，I，II『岡山大学経済学会雑誌』第1巻第2号，第3・4号（昭和45年）。

〔10〕 _____，"シュムペーターとマルクス"，『大阪大学経済学』第20巻 第1号（昭和45年）。

〔11〕 Pareto, V., *The Mind and Society,* 4vols., 1935. Dover Reprint, 2vols., 1963. 原典 *Trattato di sociologia generale,* 1916.

〔12〕 Redlich, F., "Unternehmerforschung und Weltanschauung," *Kyklos,* vol. VIII (1955) Fasc. 3.

〔13〕 Salomon, A., "German Sociology," in *Twentieth Century Sociology,* ed. by Gurwitch and Moore, 1945.

〔14〕 Schumpeter, J. A., "Die sozialen Klassen im ethnisch homogenen Milieu," (1927) in his *Aufsätze zur Soziologie,* 1953, SS. 147—213. 英訳 *Imperialism and Social Class,* 1951. 都留重人訳『帝国主義と社会階級』岩波書店（英訳からの重訳）。引用は必要に応じ原典からの直訳に従う。

〔15〕 _____, "Zur Soziologie der Imperialismen," (1919) *Ibid,* SS. 72—146.（英訳および邦訳は上掲）。

〔16〕 _____, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung,* 1912. 2 Aufl., 1924. 中山・東畑訳『経済発展の理論』岩波書店。英訳 *The Theory of*

Economic Development, 1934. 引用ページは邦訳による。

〔17〕 _____, *Essays of J. A. Schumpeter*, ed. by R. V. Clemence, 1951.

〔18〕 _____, *History of Economic Analysis*, 1954. 東畑精一訳『経済分析の歴史』7巻，岩波書店。

〔19〕 _____, *Business Cycles. A Theoretical, Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process*, 2 vols., 1939. 吉田昇三訳『景気循環論』5巻，有斐閣。

〔20〕 _____, *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1943. 3rd ed., 1950. 中山・東畑訳『資本主義・社会主義・民主主義』3巻，東洋経済新報社。

〔21〕 _____, "Unternehmer," *Handwörterbuch der Sozialwissenschaften*, 4. Aufl., 1928, Vol. Ⅷ.

〔22〕 新明正道，"パレートの選良循環の理論について"，『ファシズムの社会観』岩波書店，昭和11年。

〔23〕 鈴木成高，『封建社会の研究』弘文堂，昭和23年。

〔24〕 高橋幸八郎，『市民革命の構造』御茶の水書房，昭和26年。

〔25〕 Weber, M., *Wirtschaft und Gesellschaft*, 2 Bde., 2. Aufl., 1925.

〔26〕 Wieser, F., *Das Gesetz der Macht*, 1925.

〔27〕 _____, *Gesammelte Abhandlungen*, 1929.